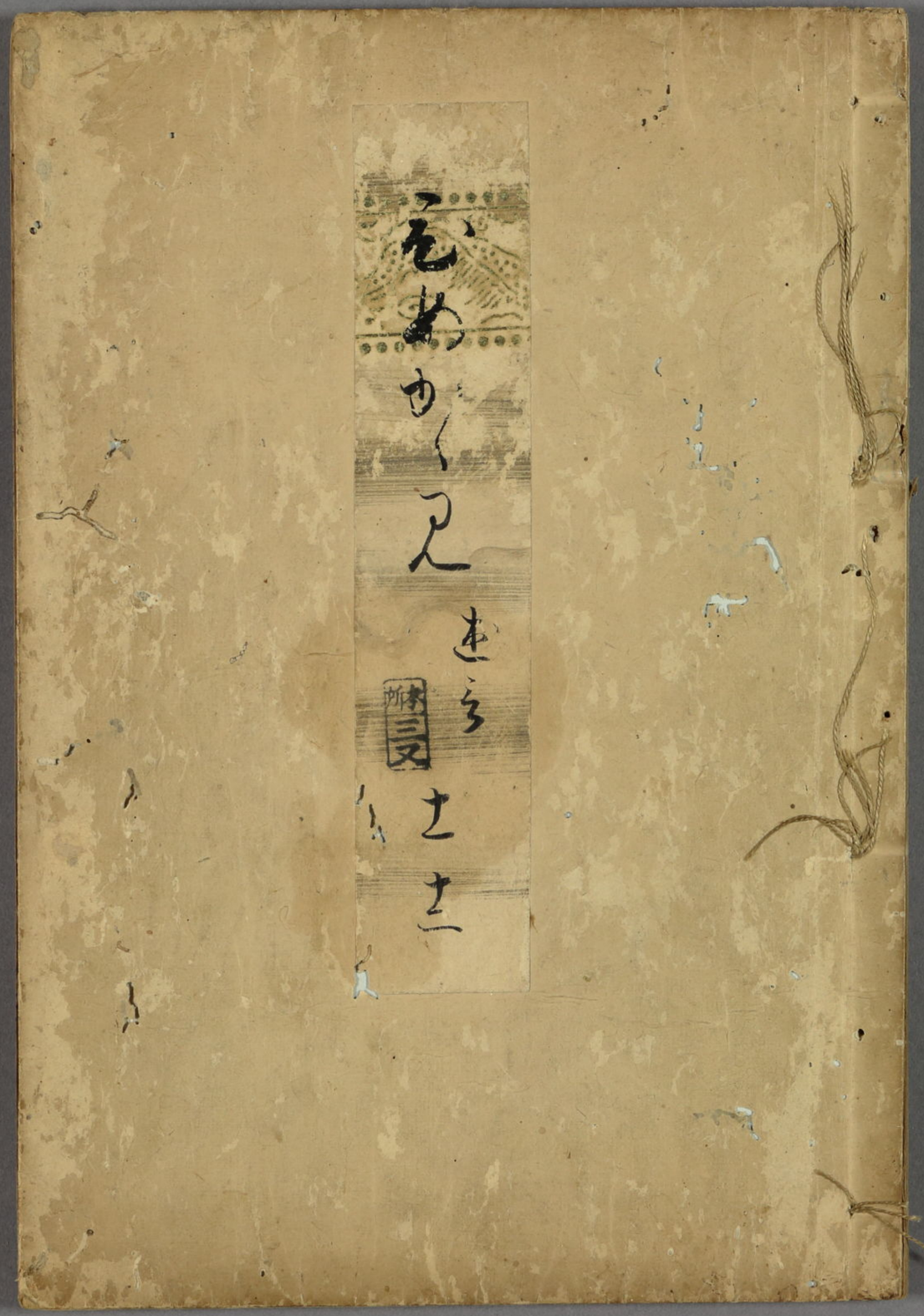


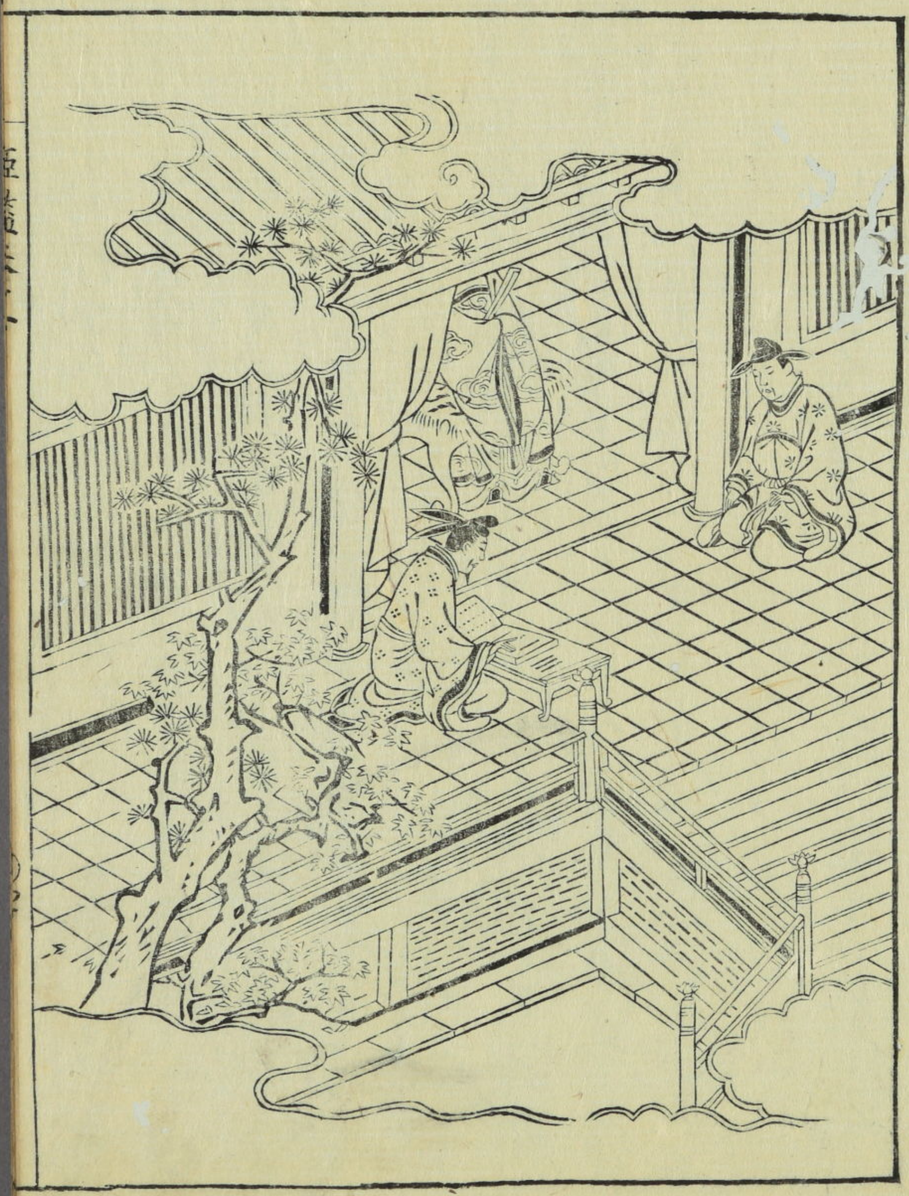
比賣神卷之十一

述言第十一　此卷は第七の卷より別なり

周易(しうえき)にいふ陰陽(いんやう)不測(ふそく)之(の)謂(いひ)神(しん)とあるごとく陰陽のあつかひ神妙(しんめう)なる事(こと)の判(べつ)り難(がた)きゆゑ陰陽の二氣(き)を以(もつ)て萬物(ばんぶつ)を生(うみ)出(いだ)すから陰陽は靈妙(れいめう)なるものゆゑ陰陽の二氣(き)を以(もつ)て萬物(ばんぶつ)を生(うみ)出(いだ)すごとく陰陽のつゞまりゆきやうを以(もつ)て萬物(ばんぶつ)をかなへ出(いだ)すごとく陰陽すでに氣(き)あれば形(かたち)あるごとく形(かたち)あるものは皆(みな)陰陽(いんやう)の靈神(れいしん)に天地(てんち)萬物(ばんぶつ)をつゝしみ敬(うやま)ふべきものなり其(その)靈(れい)なくしては萬物(ばんぶつ)を生(うみ)出(いだ)すことなし陰陽(いんやう)は天地(てんち)萬物(ばんぶつ)の父母(ふぼ)にして其(その)靈妙(れいめう)なるものをうやまひ

ゑゆへよく陽をそなへんれば陽
の靈なるゆゑに神とゐづ
神は伸の字也なり物
陰のまなり陽もの
でなり鬼神の靈あるゆゑ
明とる天地万物の神
そなるわれの中のもへの
よりて人は万物の靈なり天地の中よく人の
のふるまひごとくなるゆゑ
そのうへの人のたましひ

ものとる陰陽よりいでゝ
しぬと魄とる心は魂魄の
は鼻のいきばかりの
て耳目れどもくふれおば
ちる示するゆゑ神ぬのも
ち神ぬのちになる時やう
とゐるうるべきうち
二のありてよふなひこ
神とし感應と申
神ぬと感ずると天地陰陽の神と人のたましひ



わたつみの神その他海にちなみ
みる人名のうんもおよそ神やうくむ
うちにまつるの外よろづの神
その神まうる事あるひは祖神その宗廟という古の神
又數の神その社と社稷という或はその氏神天のは天
地ご光位方両風などの神をまつりあ郷の君ごとの山川
とまうり家のあるじいその先祖をまつるあるひは人の
死霊そのおすべく世よいさもあるひは人けあじひ物まよ
足てその初を祈じその徳をうづむるのあるひは社稷
よ事どひうひは山川よあそこひ時と称ひあるむ父母

よろづの災難よあふぐ祈るその祖神りとあるの神などた
たるあるひはむりなり
礼記にくそのまつる神よ
淫祀という淫祀は福なくして淫
祀はまつりなりそのまつるべき
かの神よそびあるひはその
かるる神よあるかどれ淫祀なりこれいのりても
ちなきのみよ称ひて祭ひそうあびその罪よあびて
あるいは祭ひて不のよろこばれたまふもこれなりいえんや
神は祀礼よそのどそのべきすぢをいめうのなどその

天の神もりぐこあくん
八幡宮の宣旨のくはゆく
りふしもそのくよ屋ぐるまをとめふて
けんのくぎれも我つまよそのくにうりぬくまりん
名ものくの神み古舎ろうく衣よそのくあくろあくんぐもむ
事ゆ　宇佐のみのまりくまくれ人らあ玉の神
よ大小若王ありるぐびもりんの八郎若神ようく海
なるふくとうあびあよいのるゆくれぐその威勢
ゆ無神いみろよくしく海なるゆをけすぐかさ法味よ
ふそくをこいのらゆをりてくんのいめろよ親ぐろ祖なりろく

ろく城のんようづきてすぐなろろよ八幡一巻四しかまる
の神社ぐものゆよたくぐ
ゆふみよ神をぐ供じて七まれちとりくの人ぎくよ紀宝ようろ
ろくぐ我といのろくもそのくろ
るゆぐたくぐ宮服のあくもあくんその
宮くはゆ神ぐびとくもろゆぐべし我つまよ並
想を神神ひるぐゆくなんり春日りろ人の世ろたをけもゆん
くぐつひの神ぐびりあくん若ぐび我つまの神力
とぐびゆてNのなれ神宮さんろぐよせの人ろおれ奉
つのやさんぐびる我うまそてそひけくろかん

くの人ゐさそうくきそうんび祢ぬそのんまうのまくくちひ
そてんのもるぐなーぬくべるのさそ丸天の月れう
うぐごれー（字脱カ）祢のく人くんれぐごちうんび祢ぬそぐさの
新そうつびいのくんけれたうんぐ人のふれたぐーきえと
ひんぐべいれぐごそてもんの海ぬんう（着城カ）ん寝そつひ寓ん
まそそのむ灰そその智海うあ、かそべ祢海の月のむう
うそそとうそ富士そ祢ぬのいいこれけうま六祢ぬの稼名
ぬのののといいうむうなり亜そそのえけぐるくいべなぐべての
人のふれ四くく亜うんぐごありいさ祇うき人のふれそこと面
ときうそ祢ぬのうび祢そうつさん名宿いむこひあぐれそうう

日のおれ祢ろそくへ祢そうそ人ぞるお雲なべての人ぬのよかく
しそんのれりそつあべ祢ぬこまそそのあるこれなり緑のんれよそる
んあるべ祢ぬこまそそのあるこれなり緑のんれよそる
らぐそ白べりろうくれ祢なりひよ天よなくひ地よあるべて
そのんい如なりとうもくろひそうんべいつろうあくうんみ
れくくるうこなく病ぬるうあ祢てるうべとふるくく天
くりふえーくく地くうあうあうそ向や
すうとそろべ祢そ一舎の音奥れ天地よかよみそごろうこと
ぞうまーさあの奥さ人くそのくれーさぐべりふ
祢ーくくうぬのんら海りう人よむそ祢の

おりひとのふたもあり　うれ
よ倫敦（ろんどん）してくりてその
のおりひと（おりびと）大きよろこびてよ
ふおりくあり　れをひと
ろひとくら天地よりてくびく
よもくんまら（まと）神ぬの人なりぬ
りるうんそれくうくみく神ぬの墓（いと）安房（あは）我ら心
ぬ天地ろふとんとりろ人もこうる天るひぬようを
てうるうべく中山（なかやま）まも人のんおてをと天地のやもまよ
を人のふおくるふとろ六天地乃々七（ななつ）江戸（えど）まと人ぐわあう

ちのことをつくることなくてその身すがたち天地なりそのんやうち神明なりぬてぶいつてなせばぶつをこそとびそろふおりひそろふをいかり給ふ豊秋入根命まことの心なり

ぬよちろろ野ー尚そそれ天とそそそそ地よほほ人神のそそや
まひ出祖とそそろろ宗廟そそそそそそ天のそいざとそそろ
紅ちのいそそ式あろぞけそそそそそそ神祇と奉あーたそまろ且まひ人
ひまそとそそろろよおりよものかんそそろろるものいろいでたがふべ
倭姫命　天地のゆーなひそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
大幡　仔細ろ出ぬあそ宗廟そそそそそそそそそそそそそそそそそそ
など式社禰といそひまそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
書よひそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
ろりなれいまを由そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
おそこふそひそりてそひりぬ人のそろそそそそそそそそそそそそ

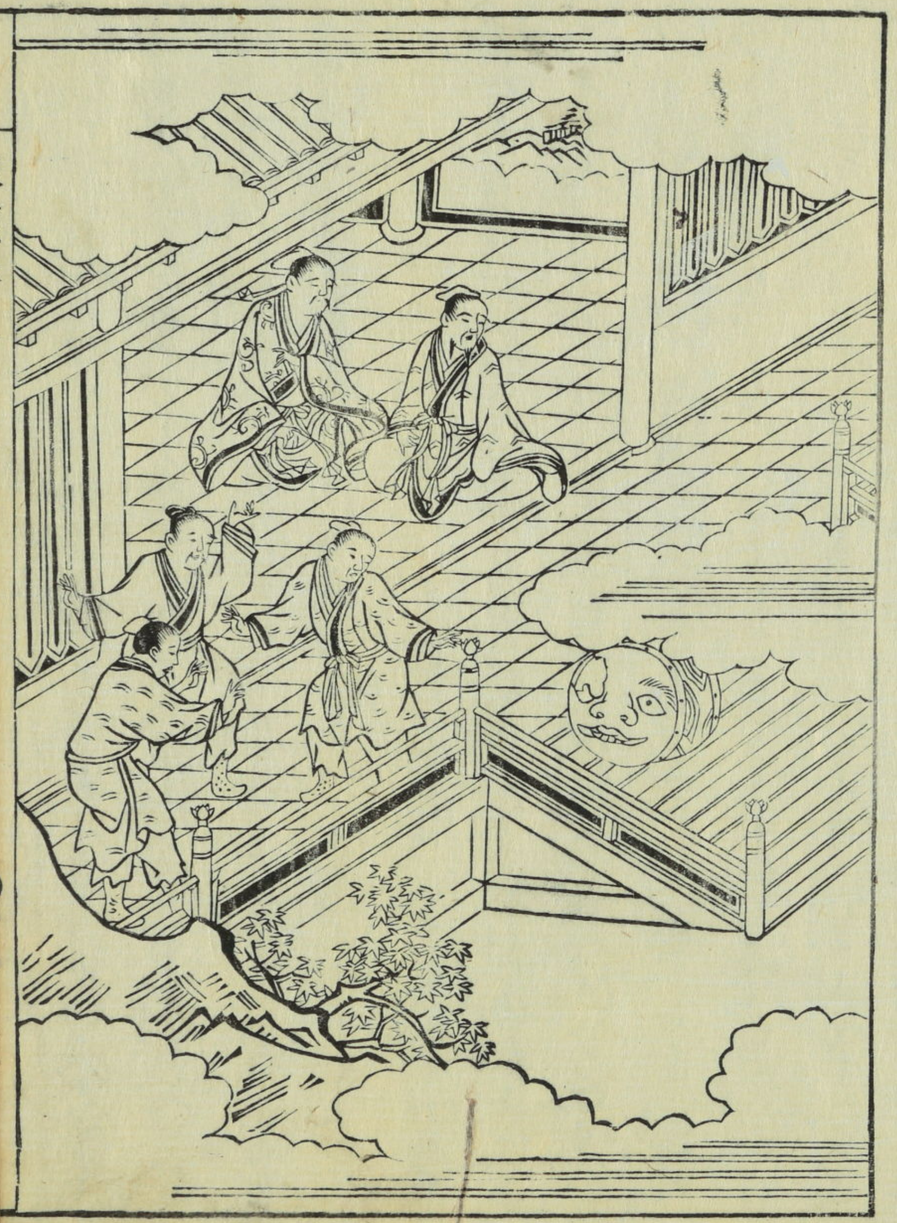
うみそそろろろしれあの面ようろろんとそれ
あめち大神のまひ
そそを由そそ神のそうふまそそそそそそそそそそそそそそそそそ
りてそそそもまそろりてそ仙の神それの霊おそそひなそひ
かそそを化りほそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
滝祀とそ大社のそうれみ社若神のそうよ西神とそそそそそそそ
そぐひなるべーその霊さうんおろそれいのりよりて称ひ
そそれへとそれおまへたそうそそそそそそそそそそそそそそそそ
どその霊そろそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
そのおなそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ

物をてらし雨雷風雨のうごかすごとくなれども
神はなんらごともそのごとくにてその理さごうるゆへいわるゆへ
てのゆることをうくることなくそのゆることにおいてその対徳
そなさんとしてゆることに煩汚をそげまたおこさしめざる
ふうりんもつくることなくうるわしき徳をもちてまた
まことあることなくこしあうよ天地の神ゆえんなり理のりしありて而してそのたとけそかさを煩汚に
神愛ありこのことをなりて天の琴座などのいつるゆえん
そうして天の病すべて而乱よあらゆる人の乱血いたくしんじことも
清らかとおおうごやうれその根なきさ抱あるあるよ

あまつごとくくもくうめんどもざうひあるよりのさなれ事も
あり付よそのゆえさむさだ夫妻さしくのさを要へバ
病若いゆるなうこうれバ嫉妬のごひなるれども霊あるひ
事さうれやふあごとくのようあるひ
も蜀実風格ありまうく精つる人みよかりるごてよ
うふ死ううご媒眼いまごうせびて悔なる人さる
やゆんを霊なりとて而いさうあり現ハ神像の内へさけ
ふりを物といさうこあく霊あるむろはあり現ハ地理城
こうをなくよ霊ありこのゆえ霊ありなり現ハ仏そさそさ

てを拭人伝仰ぎさうりて拍ク称ぬこれハ人の精
気とかや精気とハおつまりてこづく霊をなびりさ
おうひい老猿大蛇さぐひうれすこうとうくこれよすめり人お
それく称称なりとおりひて供食ととなんあり人をいる
ふまりて勉をまうるまもさこれい害あるぐりまて霊るーろ
やのさぐひうふ心ふーうさんとうさとうさ処理をわさう
うりてやぐりをづろとれたたりをりあんうまり唐の狄
梁公八江淮の流犯より七百まぢでこぐちれともその男女
さうゆきそとうりね文案の程明遠京北府ろとひてあり
とれそのおよん仏あり八毎ようくけのかーらうり老さひて

釈日ろくんまのう法どるあうけうとさてりーみるりさば
うるぐぞつぐさうべしその首さうりてさーろうんといつり
うハそれうもうもさびんりもさうんとうしめうおよありけう嬉犯一布をぎりとのべーとか目よ令せう
しうふ心人令をうくろとひやーくたちの兄なえさうこれとも
おそんぞ勉よおりゆきうれば扱の内よ衆宝もうさてうの称像とうるーうりてんさもーひうりすくくとうへうさ盗ありその中うりくぬと
うとうの出さうるうと時よありハすおうらいえてくり山かの事
なぐくれうーろべし



せうありやしさぐけものなどいのくさ病人をあどへ
そうのさーすべくさんしさへ妖怪ふてくる私もうかをおなり
そんし浅湯のもいお本所ーさ机ごもそごくりわむとばくおおと
ぶ私乳その中ふり出まり抱よ物をそびょまうひく私くれみ
寺性とあーふとなり乳血の病毒よふりて病のおふとろごこ
やーその乳りとふふらなさ流よありひいてこたりてひろり
そふーあふひ乳よつまくこふ私考ふろいさ抱う人抱
ようと武いあふさふのをおよつこて性そふー私ふりふをを
分外の像よつこて霊となひるありた侍よいく妖ハ人よ
ふりてふふふと大やうへつひょありやーこそふそふくところふと

よあくうてゐくそのまをとなるよあーさるよあーんやむろ
しる世大仰ぶんそそそ地のたまいた理よろうよぶぶろ河八ゑ一
乃理よろうよぶぶろ河八ゑ一とうろうれなりそれ心志四
く精力つくく権勢さんなろんぶんやう湯のさぐひなろゆんて
活れちぶぐまそそび世のうろんなて事をゐくそ八四くく精もすぐうんなりて勢事よと
うそそくるりりさまぶんなそのたあよふれうら
あびてれもよもくあくるりりんのいむのたやーはせ
ぬうれなり

比賣鑑巻之十一

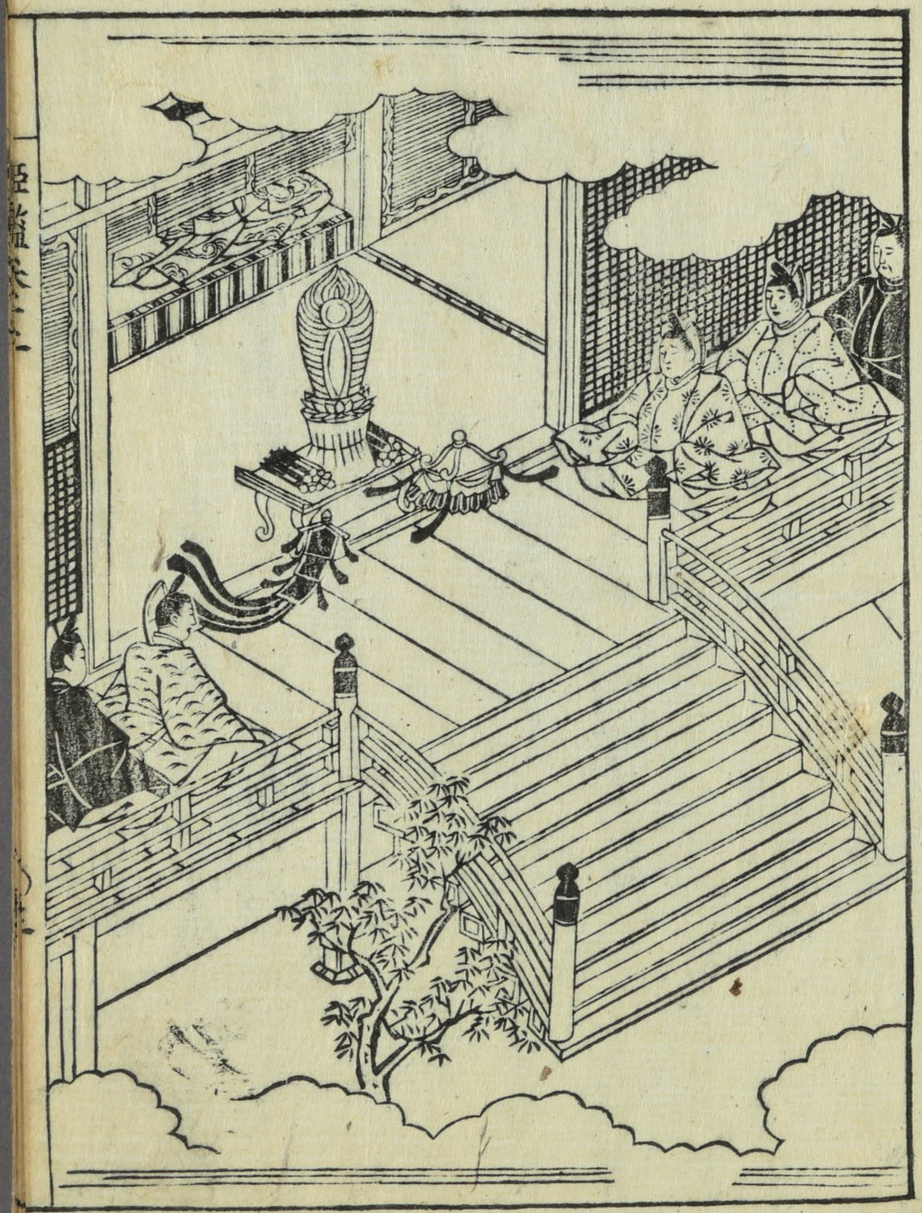
比賣鑑巻之十二

述言第十二　以巻ハ皆七のまきの十ふなり

佛乃ぶんりわと西域のおうさんでまりあれ活
あもさるくれ活ハその一川心は渓のゆ事九さそぶりて
もろーふさるゆはのれ活ハ四十二章りゆく因果九
ーそぶ世のつひ乃河ーそたりうよ活りれなりのら乃
活湯ハりろーれ久まあるゆの活を九そへ
たそのやなーろふさりそこのむ去月ふそひ月ふまーぎ
とくふなぐとゆろまりされ警宋の活まその儒を
ん義活後ぐうりなりろを梁のをよ達摩りろ来ゐ

中務をうづめ給ひしみそのあづさにたぐひたる性
とうとく侍りし河合善行をたのみてかくけうなることをし
けるより禄宗さうれいにおこなひくわんぎやうをつとめ
ところへよろこびまうでしに八宝三年七代継神天皇の世
よりもろこし楽の曼荼羅の達者くつわりのところにて奏我朝
月あそびよりはじまりむつごのみこと欽明天皇の治世
百済よりつくわんおんの像ひとつなびに幡天蓋の荘厳
とともにもろこしよりわたりたまふ稲目大臣みこと
おがみたてまつりけるを物部尾輿なかとみの朝臣
なれいみこのおしへのよべきにあらずとおりもの

吳国の神と称するものありてこれをみだりおこ
なひてば寺として仏像を稲目かくびぬ稲目ところひくくその向あれ
ばなりその法ひろまりて疫病さかりにしてとまるべくもあら
ずこれ仏をうやまひたてまつりしによりてなり仏像を難波のながれ
みどころにすてさせたまひつぎの帝用明天皇の治世に尾輿
がよ等屋大連となり稲目が馬子大臣となるにおよびて仏
法をおこせり百済よりわたりたまひしの時よりこのかた



つぎに宮柏弘のことを
ものらをそうしゆく
かくてくよりれば
天皇いるようそうむ
たのこうびかまり
るおを保せまくる
うふ弑しまる厥
人となりけるあ
きのみど推古
きり世よ至

浄土宗の恵ん空法然をひろひ禅宗の栄
西道元宋より帰朝の中にも浄土
宗の恩痴best愚の人をすゝめ法華宗よりも盛に仏法を弘まく今ようく
其の教方よりくも一種の
けくを拵よとのつゝごきを聞まゝ理ありて
うことけば陽となり云ば陰となれば陰陽の気なり理ハ気
の内よりて別なものにあらず

どもごく記しまうす二河のいさかひようてうどの如きも
のうのやまびこ陰陽を二河よそごくく動静をあーろく
せ育をるを知をれば
おなる而ご別の気非とこゝろ得ざるべからず
二河あさんござれども化万物をそなへる地河也ひ
もろのなくまぐこそごもる一生死為のちぢめをちりと
陰陽の二気あひまろ時よりおよせびをうわーてさくおろ
もろまで生気のうつわるやまびこて気のはたらく時よ
死を宥もりて云なり消ちりておるもの一あとうせざる
抱ハ又別なものごとくいふ事なれ気あひまりて生ぞろこすでに

ちりくろき気こそびうろありの
ごとくちりて池をうめ骸骨
かよはうるるそのくちあるそのあり
ゆえおびただしき池あり
気こそくくちりあり又池をこえ陰陽
よりあひてうるおひ出の物を起るなり
そもそもちくさ草木なんどの
中気あり陰陽をもつ
めの気天よりくだり時雨
ろいてたの気いや時の肉のようなりめ
の神ありてうるおひ

此のかへおひ出る所なさうにおもふ人もこゝろ
そのまさる所なく又舎衛なりとそる情の類い此
そうあり少よく識量勤あり
そうにおるゝうそびやかに事一ん百神通
今見してあらびなくびくそのたまゝねもとにさ
やうあり所なく能のいろあるやそうび
ちく記ちさらいくすやうあるる情のせうそう陽やと
らざありひくあまりのそのうれい汗眠の名
そこのなれもひうのよなる所よりありひく霊あり死
すりはよおよびて眠いとよくでう二のまうく

所よりくそく霊あり
すやうよりびかのせれ
そぐ地しき弁よぶく
関をりまくにそ人の軟神
乳そあくこんく投関もう
乳質いよくすこ眠眠いよ
去根の一理ろ里そろ地あり一ん
百弁の男その理れおもう
くその則よたくふるり
はくやり色そべ性をはく

世をおさめ民をすくひ人物をそだてんとならば
うれひなき物の性をたくみ学問性理の理をきはめ
をもくしまをおさめて徳を養ひ性をつくすんをもまのあたり
さそその名と千万年のゝ後の人物をおもひくり日新の
そのまをたとふる心学実践の天生記のおもて百物のうげ大
小おりくごめやくり自然の万理なり所よふ
天為のようもまをくいさくうこまをりてめんれをのがんと
するんのまとそろ天地の物さをさごろをそのの
徳くすふなるひくく人物をあもくく益すにたのりこまを
人天地の物をまそろ法おりくいもまんぞいまろ法な

つくさごろんの法式を神するおりち天徳をうけろ物るりに
もりてそのつくまをのこ記をひく法ごろ物るりに所よ仁を
すおうちんの徳ようてお後の乃孫をろのすもすべく仁愛
のんをむひてそなわそもくく本格の一理ようろおくを
忍れ四つさなりたりくはのいろひようりくそ
乃至のまようまろるものあろいう五形の変なり神よ意人
も天ごろくつぬをうむありくむものをおさあのふに
ようてやごこさ尊の形よろかりうまを格乃とふ
神よりての中庸なりすべくなるもそ九徳五一理の
うまようさくその形ごをまんのもろうふとい

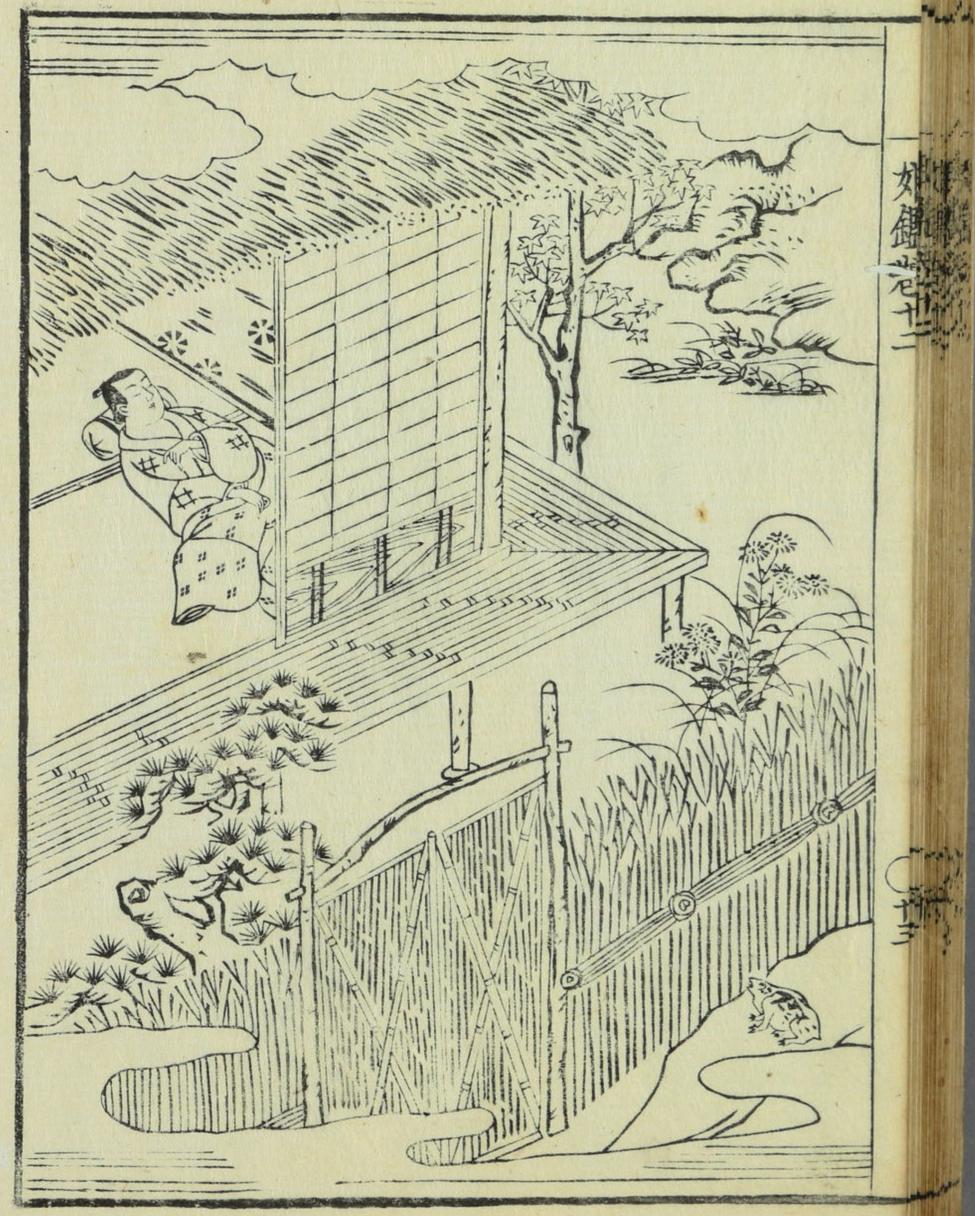
仏法にもあれこれありそもそもこれ
その名を聞きその理のようにうけて非機のようあり非
を縄縛こころの霊なり機いまだ非機眼耳
鼻舌身意の六塵に
そむかい輪廻生死というべし況や解脱をえて
るすべ非機をわりみだ塵声香味触法の六塵に
んの内むかえて一如の性に備の性相理ありこの
性にもなりつるをえこころをもってこころ
ふかりてびたりて性をもんにくふかんするのみち我もなく
ぬく幻化の生死のかくのごとく二世仏と性をさりあって苦住

ふ滅安楽自在やり一切法と神をあげうて清浄
生をあまねくすべてこの又無をもってくすべての山世
こに就のない一世のちかくに人倫のごとくありて縁し
むてびび成仏れべ世くの衆生みもたびび人をに
くりの巻いてあちされどもなき死のごとくなり備
ての如くのごとくのごとくのがきとなり
仏のごとくのごとくありこのがきとなり
ドかざるあこ海せとの
仏氏よりれを業の化身なりそのそこせる
万法の内よこあくそうの

て仏わりいでそろあくうそのかたちなり地獄の
変相十王や天女などいりうつ唐の世れ人ものきろうみよ
ひとくその時の風俗なりわ衆又経の薬かうとそれあひもた
てそのくちちそうくきあよ罪といのおそだくれよかさも
まうりへとれの宰よりまこうもづくるかどもうのお
の刑法なりうとやひものぐひ等久しく世よつくりていくる
うくうへ人ものよ漫よ行法うとうわさ終よ死してよ
そづくうとのおうりうしうどへ一人も閻王庭そうんてうあへ人
いまでいひそあなよなまべゆあどふもうんさうなり浮より
のちの四苦をもくるまでさいよくさうりて人のふ

まそこへ人のうべるふの河までも終れうまろ
うわろあよ人の伝作いよくうまろ
漫よのつくもそわひとうりふくうとく
どもあやうり疾と病と知
ひ大よ美なりとへでもふくとく
なりとそせのつひあうあひうんてあろ
人のひんそうあるひ八疾病よそ
あよすこれるまそもれ我人ものあんくこと
とん法陽の西理よおづあるひとうのなそ
どもふ海とそ悟よあうまつのなうぶ

なりとぞ
ようく夢さめてこそ
ひさくにはくいさぎよひ
ゆくぶさ理ありみ
感應（かんおう）より
出るものやしかるべき
人のやしまび
おかろんぢつのみなりを
なりをもよみり
あしびされどもかせよ
異（あや）まの感應（かんおう）なりうんめう
もとを小感ずるゆゑ
のめぐりあひ
たるものあまでもその
ものゝんとなるもの
たぐひそうりたる
ありの
あやしきとをそるなり
えらひく禍福生死は天よ



孤のひろさんをそそ
人形てなまるねすや
らく霊(れい)をなそそあま
うたあろ官人(うにん)の妻(つま)
色どそ
よつそく寃速(ねんど)のそ
けろぶ妻(つま)い記
ぶんそんそあそ
そもみあろ
のあそ霊(つま)の肉(にく)

乃祖神をまつりおろし仏
祝言してほよゆくそこを神霊のやどろべきふるまひそこびと
いふあるにこころに斧をかくしひさまづきてゆく人を
ゆくさいなりぬとてつまむ神霊やとんずるいびくうかう
のかりえおろはぬそこびけ沸るごとくすごりの座ひとごま
まつりとわくかまりおさそこづくまれるものうみさるけ
だものみうよあくぶんものかるっを巻の順縁こうてこまをするの
なんぢうよそこそ座をそこやもかつひる新よあさごうてくる
くろりよそあげつそこをゆくこうろびおくりれ天
皇よとくのぶまつるありそろうものこてこうれ入びと

ふるさとのいにしへの仕事よ伏ぞくれのたうこを角よろるひや
けりうふる跡陽よなづこそふるよあるこそ座をありひやく
む世よあうえおようくは氏をそこいまうれうこと私こうの
なり内孤活遍が踏筆よ
ゆくものおもよさるりあの門さひりひさめ月もまごふにこまをや
うそそこれをそてとうおさるこうにこまをや
くうのきむそ誉の喜史井忌いうちまでてをそれうはよまそこ
うぎうひよあくりとふそのの猿御のやまさるをふう入兵
うち梗そそてうけよ麻とうそ入もり空の回るお朝その陣
そやうんとふそれい今平の西こまそこぐあそうさ北よ兵そそ

うひ〳〵はんかうくはてすて死ぬな並人のおやそ〳〵かゝのりものその
中よあ〳〵んぐそのにやけるんこそといこそと衛そのた法師宅
しみぐ墓をあぐそくそ平荘のおくふおやさもり無のつくりの前め
部墨の塚をさあけつ河人の墓ともりくかぐもやく前人こ
とをそんく河をるぐいくいくあ十倍せろ涙の主拳焚如れ
附并つるとく陳良をやさくりた人うぐのやくるのとぐ
とちあよくすまかくのこぐりみぐいく並の南よそ天
のまのり親厭死とう河くそのちむ〳〵を祝してすく服よその
骨くそづむ拳の西よ儀渠のまわり親厭死とう河ふ彩とう
てこまやくその経をんくこれと登廻といさてちよ若ゆを

時うつそう法師あやまりて奥ぶかきその夢みなさけなくもあるうとうしみそるものさうなりくやしくもあるうとうしみそるものさうなりくやしくもあるうとうしみそるものさうなりくやし

よおひえてうみくりおこさあげるそのあるをびやうどうたあてて角くるまとまこそぞとうそ小鰹大鰹ふみ二日よつくりてなひひさよおさあへくるまりしうしがつるまあんまうのびをなりひまうこおりしんへおりうどん天ぷらそう大根おろしへうまをあうべくらいでねうくいまうしべくしてくまつ

比賣鑑巻第十二